

昭和61(1986)年に副都心として位置付けられた「臨海副都心」は、東京臨海部の中心部に位置し、台場・青海・有明北・有明南という4つの地区から成ります。これらの地区はもともと埋立地でしたが、都心に近いながらも広大な土地を擁しており、過密化する都心の機能を

分散させ、時代の潮流に合わせて国際化・情報化の拠点を整備する場所として期待されました。

総開発面積442haの副都心開発は、職と住のバランスのとれた理想的な未来型都市の実現を目指した、まさに一大プロジェクトでした。

臨海副都心まちづくり

臨海部では開発を見直し、まちづくりの基本となる計画として、平成9(1997)年に「臨海副都心まちづくり推進計画」を策定・公表しました。最先端の都市インフラを備え、羽田空港・成田空港へのアクセスも良好な臨海副都心は、ウォーターフロントの魅力を最大限に活かした水辺や緑の空間、うまいとやすらぎのある都市景観を創造し、職・住・学・遊の機能が複合したアメニティの高いまちづくり、観光・交流のまちづくりが進められています。



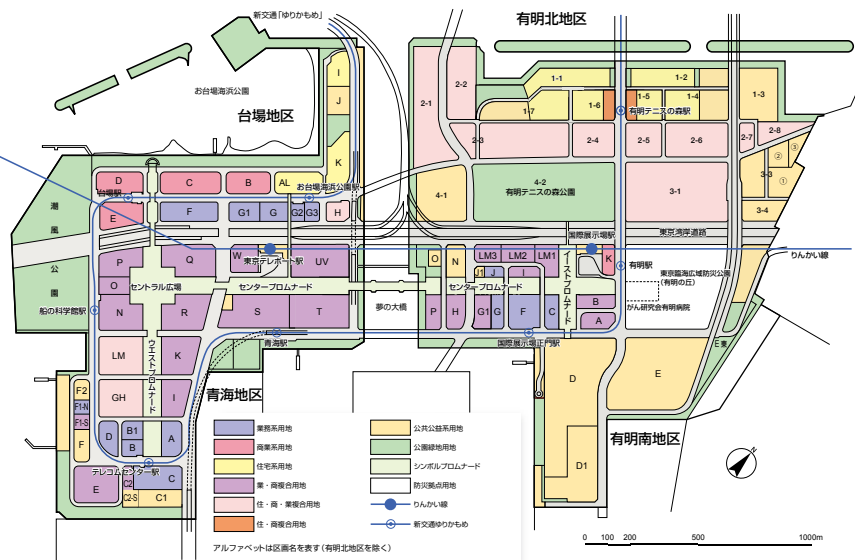
出典：東京都港湾局 東京港フォトギャラリー「臨海副都心地区全景」



臨海副都心の位置 提供：東京都港湾局



レインボーブリッジと東京タワー
提供：アマナイメージズ



臨海副都心の土地利用計画図 平成28(2016)年7月時点

各地区の開発は、まちなみの一体性や生活圏としてのまとまりに配慮し、各地区の個性を生かしたまちづくりが進められてきました。また、これに併せて新交通システムや鉄道路線、高速道路などのインフラが整備されていきました。

出典：東京都港湾局「臨海副都心のまちづくり」



台場地区

テレビ局の本社(写真左)や個性的な商業・娯楽施設、宿泊施設(写真右)が立地するほか、海と砂浜を楽しめるお台場海浜公園があり、一大観光拠点として多くの観光客を引き付けています。

(左)提供：公益財団法人東京観光財団「GO TOKYO 東京の観光公式サイト」

(右)提供：グラントニコウ東京台場



有明北地区

国際大会が開かれる「有明テニスの森公園」があり、多くの都民がスポーツに親しみ、水辺空間を活かした高層マンションの建設が進み、都民の暮らしの場としても発展しています。

提供：ピクスタ

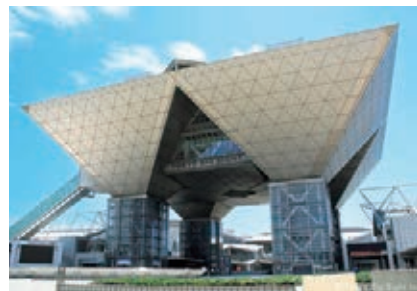


青海地区

テレコムセンタービル(写真左)を中核とし、日本科学未来館、都立産業技術系研究センターといった研修・研究施設が立地する情報・研究施設が集積するとともに、シンボルプロムナード公園(写真右)や複合商業施設など多様な都市機能を擁しています。

(左)提供：株式会社東京テレポートセンター

(右)提供：東京港埠頭株式会社



有明南地区

日本最大の国際展示場を誇る東京ビッグサイトを中心とした国際コンベンション機能と、それを支援するホテルなどが集積しているとともに、災害時に後方医療活動を行う病院をはじめとする広域防災拠点が整備されています。

提供：株式会社東京ビッグサイト



羽田空港整備の進展

●羽田空港(東京国際空港)は、昭和6(1931)年、わが国初の国営民間航空専用空港「東京飛行場」として開港し、戦後、連合国軍により接収されていた時期を経て、現在の「東京国際空港」へと改称されました。

●昭和53(1978)年には、成田空港(新東京国際空港)の開港に伴い、中華航空を除く全ての国際線が成田に移転し、羽田空港は国内線空港としての役割を担うこととなりました。航空機の大型化・高速・大量輸送時代が到来すると、その需要は急激な増加を見せ、処理能力は限界に達します。

●空港施設を沖合へ展開する「東京国際空港沖合展開事業」が、昭和59(1984)年から平成19(2007)年にかけて行われました。これにより、空港面積は1,271haと従来の586haの2倍以上となり、空港処理能力も年間25.6万回と従来の16万回に比べ1.6倍という飛躍的向上が図られました。

●その後も、グローバルな都市間競争の時代を迎えて、さらに増加を続ける航空需要に対応するため、羽田空港の再拡張(0滑走路完成2010年)とともに、再国際化が行われ、更なる機能強化が求められています。



(上)昭和45(1970)年
(下)平成12(2000)年
提供：関東地方整備局 東京空港整備事務所